戦火に散ったアスリート⑯

初代全日本のエース・最速投手

巨人 青柴 憲一

2009年のプロ野球は巨人の日本一で幕を閉じた。野村楽天のクライマックス・シリーズ進出や米大リーグ・ヤンキース松井のワールドシリーズでの大活躍もあり、終盤に見所が多かったせいか、日本代表が春先の第2回国別対抗戦WBCを連覇したことなど遠い昔のようだ。そこで今回は、原ジャパンと原巨人に敬意を表して？　かつての好投手に焦点を当てた。日本に職業野球が誕生したころ、全日本のエースは京都生まれの青柴憲一だった。

（新聞うずみ火・吉岡雅史）

青柴も5歳年下の沢村を可愛がった

野球の日米対決といえば、1934（昭和9）年に静岡・草薙球場で、17歳の沢村栄治が演じた快投は、今も語り草である。三振を9個奪い、失点は〝鉄人〟ルー・ゲーリッグのソロホームラン1本。

一躍〝スクールボーイ・サワムラ〟は全米に知れ渡った。戦死したこともあり、日本球界は、年間で最も優秀な投手に贈る「沢村賞」として、その栄誉をたたえている。

この時のエースは沢村ではなく、立命館大を中退してノンプロでプレーしていた青柴だった。昭和初期としては長身の174センチから投げ下ろし、「日本最速投手」の呼び声が高かった。京都商業にいた沢村は、同じ京都の青柴に憧れ、青柴も5歳下の沢村を可愛がったという。

3番ベーブ・ルース、4番ゲーリッグ、5番ジミー・フォックスの3人合わせて通算1741本塁打を誇るクリーン・アップが打ちまくり、16戦全勝。ルースひとりでホームラン13本、33打点と、まるでマンガのような暴れぶりだ。

初代全日本のエース青柴は、最初の登板で満塁ホームランを打たれ、5試合に投げて0勝3敗と散々。それでも「どの人もこの人も、よう打たはりまっせ」とさばさばとしていた。

この年の冬に、青柴は大日本東京野球倶楽部と契約した。チームは翌35年、4カ月に及ぶ第1回米国遠征を行う。帰国すると凱旋試合をして、各地で本場仕込みの野球を披露した。この大日本東京野球倶楽部が東京巨人軍となり、36年の秋から職業野球の船出へとつながっていく。

誕生したばかりの巨人でもエースは青柴。沢村でなかった

巨人は背番号を、打順で決めたヤンキースにならって野手が1番から12番までとした。投手は13番以降だった。沢村が14で、13を青柴が背負った。誕生したばかりの巨人でも、エースは青柴だったのだ。

公式戦にさきがけて36年2月9日、最初のプロ同士の対戦となる東京巨人軍対名古屋金鯱（きんこ）軍の試合が名古屋で行われた。

巨人の先発はもちろん青柴。歴史的な第1球を投げた。だが、寒さと緊張感からか2回途中でKO。巨人も大敗したため、青柴は期せずして〝敗戦投手第1号〟として球史に名を刻んでしまった。

アマチュア時代は速球投手の名をほしいままにしてきた青柴だったが、巨人では状況が異なった。

「肩を故障でもしていたんじゃないでしょうか。もともと、喘息の持病もありましたし」

こう話すのは青柴の長男・憲治さん（63）である。

38年の春季リーグを最後に、青柴は8月に召集され中国戦線へ送られた。結局、3年間の通算成績は3勝4敗だった。

ほどなく、喘息が悪化して長期入院。40年2月に召集が解除されると、東京の実業団チームで野球を再開。その後、大連に渡ってプレーを続けたが、結婚して長女が生まれると、野球に決別して会社を興した。

経営は順調で、家族のために預金をした。白米10キロ6円の時代に、3万円以上を蓄えている。

2度目の召集は45年7月末。すでに修子夫人は第二子を宿していた。それが憲治さんである。青柴は、夫人に「あとを頼む。これだけあれば大丈夫だろう」と言って、通帳一式を手渡したという。

ところが、出征から半月で終戦を迎えると、虎の子の預金は封鎖され、国債も紙くず同然に。貧困の中、46年2月に憲治さんが生まれ、47年に母子はようやく帰国を果たした。その間、青柴は中国の野戦病院で病死しているが、家族は知るよしもない。

修子さんは最近まで、能勢で憲治さん夫婦と元気に暮らしていた。09年5月にクモ膜下出血のため89歳で急死したが、戦争にまつわる苦労話は、家族にも一切口にしなかった。

「そんな母が、帰国したとき父の両親から〝憲一は一緒じゃないのか〟〝憲一はどうした〟と問い詰められ、とても困ったということだけは、聞かされました」と、憲治さんは話す。

能勢は、教師だった修子さんの地元である。

WBCでアメリカを倒した勇姿に青柴の姿を見た

「みんな青柴憲一のことを知っていて、父親がプロ野球選手だったことはいつも聞かされた。すごい人だったとは思うけど、自慢しようとも思わない。なにしろ一度も会ったことがないものですから」

死亡通知書が届いたのは戦後4年目。骨壺には「戦死」の紙切れ1枚が収められていた。

青柴が子ども扱いされたアメリカを、75年後の平成の選手たちはWBCの準決勝で倒した。松坂やマー君、そしてダルビッシュの力投を改めて思い出す。彼らの勇姿に、見たこともない青柴の姿がだぶるような気がした。

巨人退団後、大連時代の青柴のピッチングフォーム

父・憲一の遺影を手にする長男の憲治さん（左）と妻の節子さん